

公立小・中学校教員の採用見込み者数を上回る退職者

文部科学省の調査で現在の公立小・中学校教員の年齢構成をみると、大量採用期の40歳代から50歳代前半の層が多く、中堅層以下の世代が少ない。今後、大量採用期世代の退職で、平成19年度末には1万9971人。平成21年度末には2万1487人の退職者が見込まれている。これは平成21年度の採用見込み数1万7975人を上回る退職者数となる。

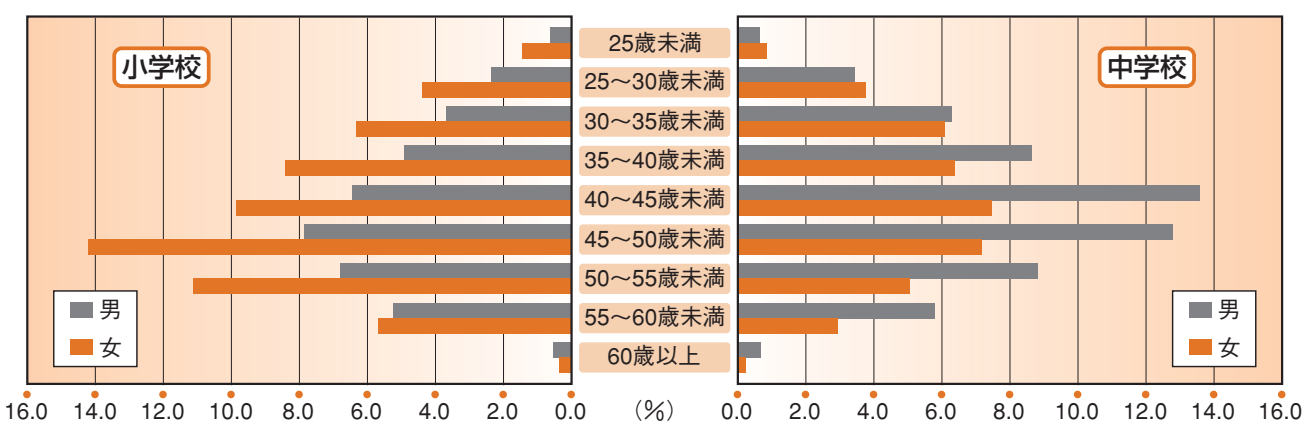
現在、都道府県教育委員会や市町村教育委員会などにおいて、量および質の両面で優れた教員を確保するために、受験年齢制限の緩和や撤廃、特別免許状や特別非常勤講師制度の活用による社会人経験者の登用など多様な人材を確保するための改善や工夫が図られている。

●公立小・中学校教員の年齢構成（5歳階級区分）および平均年齢

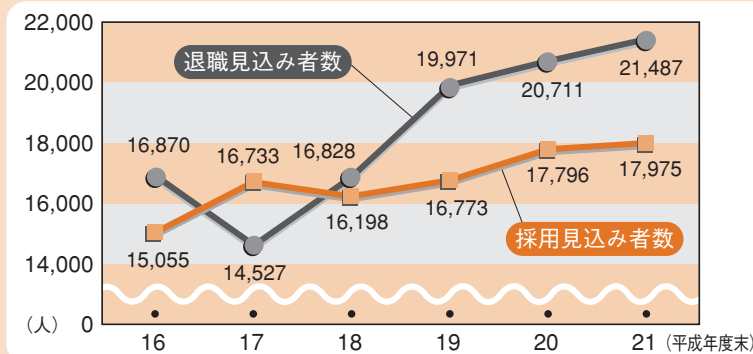
	本務教員数 (人)	合計	25歳 未満	25～30 歳未満	30～35 歳未満	35～40 歳未満	40～45 歳未満	45～50 歳未満	50～55 歳未満	55～60 歳未満	60歳 以上	平均年齢(歳)	
												男性	女性
小学校	388,664	100	2.1	6.8	10	13.3	16.2	22.1	17.9	10.9	0.8	44.8	43.7
中学校	234,017	100	1.6	7.2	12.4	15	20.9	19.8	13.7	8.5	0.9	43.8	41.6

(注) 少数点以下第2位を四捨五入しているため、計と内訳の合計が一致しない場合がある。

●公立小・中学校教員の男女別年齢構成（5歳階級区分）



●公立小・中学校教員の採用見込み者数と退職見込み者数



(注) 上記の数は、都道府県の推計の積み上げによる。(初等中等教育局財務課調べ)
(文部科学省「平成16年度学校教員統計調査」より抜粋)



きょういく eye

きょういく アイ

— Information for Boards of Education —



巻頭言

コミュニケーション力がゲームをコントロール

財団法人 日本サッカー協会
トップフェリヤー インストラクター 上川 徹

サッカーの試合において審判員の役割とは、競技規則に沿って反則が起きた時に笛を吹き必要があればカードを示す、と同時に試合をコントロール（選手が安全にプレーに集中できる環境を整える）することも求められています。オーケストラの指揮者に喩えられることがありますが、試合をスペクタクルなものにするのは選手であって決して審判員ではないのです。あくまでも、審判員はサポート役であり裏方的な存在でしかありません。

そのコントロールとは、私は「予防」と「対処」の繰り返しであるように思います。試合は突然変化します。選手の意図、試合の温度や雰囲気など流れを常に読みながら客観的に眺めます。アンテナを広げ、落ち着きの無い選手や不満を持っている選手、あるいは我々を試してくる選手がいないか。いかに気付き、予防となる対処を取らなくてはなりません。その対処法の一つが選手への声掛け、コミュニケーションです。

まず自分へのコミュニケーションをはかります。試合に流され、自分を失い感情的になっては、選手に不信感を持たれるだけで試合を壊しかねません。選手との駆け引きを楽しむぐらいの余裕があれば、アイデアと経



験が引き出されてくるのではないのでしょうか。

次に、選手へのコミュニケーションです。タイミングを計りプライベートに注意するのか、あるいはパブリックに観客や他の選手にもわかるよう

に注意を与えるのか、状況や選手の性格に応じて対応します。笑顔を交えることもありますし、海外ではその国の言葉で声を掛け、落ち着かせたり励ましたりもします。ただし、どのような時にも毅然と、落ち着いた態度で相手の目を見て、相手を尊重し誰に対しても平等に対応することが大切です。間違っても選手の機嫌を伺うような態度は取らないようにします。

そして、何度注意しても選手が理解を示さないのであれば、次のステップの対応が必要です。すなわちカードを示します。これは、コミュニケーション、注意が多くなることで、審判に与えられた権限や権威の低下を避けるためです。

すべてが上手くいくわけではありません。高い評価を受けることも決して多くはありません。それでも、試合後に選手から感謝の気持ちをもって握手を求められた時には、達成感を味わえる至福の瞬間です。

コミュニケーション力が問われる昨今、人と人が互いに尊重し、心の繋がりを実感できることこそが、裏方ならではの楽しみなのかもしれません。

目次

コミュニケーション力がゲームをコントロール 上川 徹	1
総合的な学習の時間の再起を願う 寺木 誠伸	2,3
公立小・中学校教員の採用見込み者数を上回る退職者	4

総合的な学習の時間の再起を願う

寺木 誠伸 (福島県大沼郡三島町立三島中学校校長)

はじめに

一昔前、「総合的な学習の時間」という聞き慣れない学習領域の出現に教育現場が右往左往した時、各校の先生方は教科書も指導書もない環境を憂いながらも、様々な恵を出し合い数多くのユニークな取り組みにチャレンジし、試行錯誤を繰り返した。日本中の学校に、教師の独創性があふれ出した黄金期であったのかもしれない。

さて、校長になって1年目の公開授業研究会において、「総合的な学習の時間」の指導の機会をいただき、わくわくしながら会場に足を踏み入れた。しかし、2、3年前までは大勢の参加者で熱気にあふれていた教室が、わずか5、6名の参加者で閑散としていたのである。「ペーパーテストでは闘えても、しっかりと討論ができない日本人」「課題を追究し解決に向かって様々な観点から考察することのできない日本人」を、国際社会で競争できる真の学力を身につけた日本人にするための切り札であったはずの「総合的な学習の時間」が、「学力低下」論争の標的にされ、瀕死の重傷を負っていることをはっきりと認識させられた瞬間であった。

本校でも、学力向上には力を入れており、長期休業中の学力向上セミナー、基礎基本の徹底に向けた全校一斉学習コンテスト、10月からは、3年生を対象とした放課後2時間の補習授業、など、他校同様に様々な施策を行っている。しかしながら、併せて、「総合的な学習の時間」を、その導入の経緯、本筋について全職員で共通に理解し、真の学力をつけるための本校教育活動の柱とみなして、全職員一丸になって取り組んでいる。貴重な本ページをいただきその概要を簡単に紹介したい。

1 本校の総合的な学習の時間の基本方針

ここからは字数の都合上「総合」と省略して表記する。本校では「総合」を大きく2つのステップに分けている。第1のステップは職場体験に関わる個人研究、第2のステップは制約のないフリーテーマ

●てらき せいしん●
会津若松市教育委員会で小学校英語科創設を担当する。
趣味は剣道、合唱、ジョギング。
座右の銘「座して悩むことなく
悩みつつ行動せよ」



での個人研究である。ペアやグループ学習は、生徒同士が相互に依存しあうとともに、我々教師が、一人一人の学ぶ過程や到達状況に十分に目を向けることができなため認めていない。また、第1、2ステップともに、計画段階、まとめの段階それぞれにおいて、研究計画・実践の説明会、意見討論会、その結果からの練り直しを活動の柱にしている。

2 職場体験学習

本校の職場体験学習では、学年間のシークエンス(連続性)を特に重視している。全学年とも2日間の日程とし、一人で1事業所を体験する。1年生時は、地元の事業所、商店に訪問し、職場体験の基本的なマナーや働くことの難しさに触れさせる。2年生は、本校から車で約1時間の会津若松市内の事業所を中心として一人で体験をする。3年生については、福祉を真剣に考えさせたいという教職員の願いから、福祉施設における職場体験を行っている。なお、3年生については福祉施設を十分に確保することが難しいため、2人で1つの施設に訪問する形態をとらざるを得ない。どの学年も22時間扱いにしているが、実際の体験日2日間(12時間)は「学級活動の進路指導の時間」を活用し、事前の計画立案、計画の相互検討会、事後の訪問のまとめについては、一人一人の課題



凝縮ポートフォリオと評価カード

解決に向けての学習になるため「総合的な学習の時間」を活用している。

3年間の流れの中で、特に2年生の他市町村での一人活動は生徒にとっては大きな試練である。事前の調査が思うようにならず、計画検討会で不備を指摘され、満足できる準備ができずに大きな不安を抱えて体験に向かう生徒も少なくない。しかし、2日間を一人で乗り切ったあとの変容はとてつもないものである。なお、まとめは全員が8ページ限定の凝縮ポートフォリオの形態で仕上げている。

3 フリーテーマの個人課題解決学習

全60時間を使っての個人学習である。一人一人がテーマを設定し、全校生が一堂に会してテーマおよび研究計画の発表・相互検討会を行い、研究実践がスタートする。全校生徒がわずか44名であるため、教師一人あたり4、5人を担当し、大学のゼミのような形式で、テーマ設定から発表、まとめまでの担当をする。ある意味で教師一人一人の研究に対する力量も問われてしまう。全員のテーマを類似しているものにグループ分けするが、必ずしもきれいに分けられるものではない。ちなみに、昨年度私が担当した4名は、「只見町のブナ林を世界遺産にするには」「見たい夢を見る方法」「打ち上げ花火の不思議」「宇宙と宇宙人」についてと様々であった。

テーマ設定後は、当町で研究活動や新しい実践を行っている著名人の基調講演を聞くことから学習がスタートする。そこから、研究することの難しさ、喜び、意義などを少しずつ感じさせ、生徒の研究に対する意欲をかき立てていく。時間割上の設定は毎週金曜日の午後2単位時間を「総合の時間」と固定しているが、内容は、ゼミ担当教師の責任に任せており、個人で外部調査に出向くことも可能としている。10月末に行う文化祭において、中間発表会を行い、全員が研究の進捗状況を発表し合い、相互評価カードで意見の交換を行う。なお、時間が一人3分と短いため、発表会場に生徒一人一人の展示コーナーを準備し、そこに資料を貼付している。相互評価カードに記載された内容は、お互いの努力をほめるものが多いが、疑問点や、さらに調べてほしい点などの記入もあるため、その評価結果をもとに、12月半ばの本発表会にむけた調査研究が深まっていく。昨年度の本発表会は、一人5分の持ち時間で行い、生徒同士、教職員、保護者、地域住民からの評価を

もらうとともに、外部から2名の講師を招いて個々の発表すべてに対して指導助言をいただいた。発表方法としてはパワーポイントによるものが多かったが、●理科の実験器具を持ち込んで雲を発生させる発表●津波の押し寄せる様子をジオラマに作成して演示する発表●三島町のおみやげの開発に取り組み、特産の地鶏を使用した肉まんを調理し、全校生に味見をさせた生徒など、我々教職員が驚かされるものも少なくなかった。



意見交換の様子

4 考察

生徒は生き生きと活動し、教科の授業には意欲を示さない低学力の生徒も、学ぶ意欲を継続させて一人で発表するところまでがんばり抜くことができる。しかし、言うまでもなく、学びの過程において、研究計画を厳しく批判されたり、テーマそのものの変更を余儀なくされ、挫折を味わうこともある。また、調査が深まらず、なげやりになってしまう姿も見られ、指導する教師も苦しい思いをすることが少なくない。そのような時、私は校長として先生方に、「迷ったときに立ち止まり、時間をかけて熟考し、やり直し、各自の目標に向かって学び続けるというステップを確実に踏めるのは、共通の学びの内容が定められていない総合的な学習の時間のみである。そのステップを大切にするように」繰り返して指導している。

生徒の1年間の感想の中で「他の人の発表から知らないことをたくさん分かるようになってよかった」というのがあった。「知の交換」の場としての意味を十分に感じてくれたことがとてもうれしい。一人一人が多くの時間をかけて苦勞して身に付けた新しい知識、教養を相互に交換することで、多くの知識、教養が一人一人に吸収されていく。苦勞を知っているからこそ真剣に耳を傾け批評しあう。これが学びの本質ではないだろうか。